

義庵 孫秉熙の思想と行跡の研究

孫秉熙(1861-1922)に関する今までの研究は東学と東学農民戦争、そして天道教の分化と親日行為との関連として部分的に言及されてきたが、彼の思想と行跡に焦点を合わせた研究は少ない。その研究が足りない理由は色々あるが、とくに彼の親日行動、すなわち日露戦争の時、日本軍に資金を寄付したことや、東学教徒に日本軍の軍用鉄道の建設に労役を動員させたこと、進歩会と一進会を合併させたことが響いたと思われる。これらのことについても、冷静、かつ客観的な視点から分析し考察する必要があるのは言うまでもないのであろう。

孫秉熙は身分構造が厳格な朝鮮時代の末期に庶子として生まれた。幼い時から社会の不条理に早く目を開いた彼は自身がどのような努力をしても変わらない世の中に適応ができなかった。孫秉熙は22歳の年、「誰にも自分の中に天主(=神様)がいるので万人が平等だ。」と教える東学に入道した。東学に入道してから約3年間を修行に一進分乱した結果、東学の第2代教主海月崔時亨(1827-1898)に会う。その後、孫秉熙は海月の側近としてお祈り会と東学農民戦争に参加するなど東学の内部で影響力を高まっていった。

東学に対する政府の弾圧が強かった1896年1月5日「義庵」という道号を受けて翌日に海月の密命で全国巡りに出た。彼はその課程で東学の近代化の必要性を認識した。合法的な政治運動に通して近代化を先導する独立協会を見て政治的パワーの必要性も感じた。1898年海月の死後、東学に第3代教主になった孫秉熙は自身が直接に文明開化の体得をするため身分を隠して1901年3月に日本に行く。

彼は日本で開化派の亡命客と交流した。そして大韓帝国の将来のために若者を日本に留学させた。日露戦争の開戦説が流れる1902年9月に孫秉熙は大韓帝国の政府に「秕政改革案」を送ったが拒絶された。当時の大韓帝国政府が高宗の慧眼を遮っていると考え、日露が開戦する際には政府を転覆させようという計画を建てていたという。こうして彼は自ら動かなければならないと思って1903年夏、前参謀本部次長であり、鉄道議会会長である田村怡与造と会って日本軍と東学軍の連合攻撃で新ロシア派を粛清するクーデターを目論んだが田村の急死により失敗に終わった。

孫秉熙は新しい計画を模索した。京都府に通じて日本陸軍省に1万円を寄付し、赤十字社

にも3000円を寄付するなど金銭的な活動とともに1904年6月から参謀本部の國務局長である宇佐川一正と在朝鮮日本公使館の一等書記官である杉村濬との関係が続けていた。その結果として東学教団で民会を組織するようになった。民会を組織して近代的な文物を受け入れる表示として断髪し、日露戦争の前後に兵站業務と日本軍の軍用鉄道の建設を求めて労役した。こうした行動はその時代に西勢東占の危機で日露戦争の勝利者が東洋(=日本)になるべきだという願いから起因したと考えられる。

東学の民会は大同会→中立会→進歩会という名前で情勢に応じて変えていた。結局、東学の政治的分身である進歩会は日本に保護されていた一進会と合同した。孫秉熙は合同一進会になることを黙認したがその理由は1903年から彼が準備してきた政治改革が色んな要因で実行できなかった。そこで政府による東学の弾圧から脱するために政治的パワーが必要だったからである。

彼は自分の腹心の部下である李容九にすべての民会の権限を与えたのである。しかし、^{イヨング}李容九は1905年11月17日「一進会宣言書」を発表して一進会は無論、東学も非難されるようになった。これによって孫秉熙は李容九を含めて一進会の関連者63名を出教させ、「教政分離」の原則を命じた。

1905年12月1日に朝鮮と日本の主要新聞に東学を天道教に改名すると広告した。そして高宗との暗黙の協議を通じて1906年1月末、国事犯亡命者たちと共に帰国する。孫秉熙は帰国後、政治的な活動は自制し、文明開化運動を行って国民の啓蒙に努力した。財政が難しい学校に助けて教養雑誌を発行した。1908年からは教理講習所を全国に設置して新知識を培養させた。

1910年8月22日韓日合併によって天道教の内部では東学農民運動のような民族運動を準備し始めた。1912年に天道教の普成社の中に民族文化修好運動本部を設置して、民族運動の性格を持っている汎国民新生活運動や民族文化修好運動を開いた。第1次世界大戦が勃発すると抗日秘密決死隊である天道教救国団を結成した。1919年1月、高宗が毒殺で崩御すると全国的な反日感情は高まって孫秉熙と天道教指導部は独立万歳運動を決議した。「①大衆運動②統合した指導部③非暴力運動」という三つの基本原理を中心として他宗教との協力も準備した。1919年2月11日^{チョナムソン}崔南善が独立宣言文を書いて2月25日から印刷した独立宣言書を全国に配布した。そして1919年3月1日、孫秉熙の外32人の代表者は「独立宣言文」を朗読した後、即座で日本警察に逮捕されている。これは、学生や民衆に被害が及ぶことを望んでなかったが故に、取った行動であった。

孫秉熙は3.1独立運動によって1920年10月、西大門刑務所での3年服役刑に処された。彼が服役中、天道教教団の内部には社会主義思想が浸透し始めた。そこから保守派と革新派の対立が始めた。孫秉熙は体が弱くなっていたため1921年10月に保釈され、家で療養することになった。保守派と革新派の対立の解決の方法として「天道教大憲」体制への復帰を命じた。しかし、教団内部の革新派と保守派の対立・軋轢を收拾できないまま、孫秉熙は1922年5月19日に世を去った。そして「教徒三百万」と言われた天道教の勢力は、孫秉熙という求心力を失うと、分派し衰えていく。その後、天道教の教団はどのように変容したのか、如何なる思想と行動の変化を見せたのか。これらの問題を解くことは、今後の課題にしたい。